



ニュースレター

12/3/3
 第24号

★三重豪NZ会報 2011年度 春号★

特集 フォックス・ヘリハイク

《 本号の目次 》

- (1) 「第10回豪NZ 親善交流旅行のあらまし」 宮本由紀子
- (2) 「NZ 協会第10回親善交流旅行に参加して」 木村靖子
- (3) 「いい旅でした」 伊藤和子
- (4) 「記録：フォックス・ヘリハイク」 宮本忠

(1) 「第10回豪NZ 親善交流旅行のあらまし」 宮本由紀子

時および宿泊：3月11日 金曜 ～ 22日 火曜。機内2泊と Motel 9泊

1日目 3月11日 金曜：

セントレア 11時発 SQ0671 (→シンガポールチャンギ空港 17:20着)
 →乗り換え 19時45分発 SQ0297→

2日目 3月12日 土曜：

クライストチャーチ国際空港午前10時30分着
 →タクシーで Motel (予約) →。
 花の祭どころではない。街中心被災地は大きなダメージ。
 ハグレー公園のバラ園はオープン。前駐日NZ大使夫人(?) グループに出会う。



3日目 3月13日 日曜：

クライストチャーチ駅→ 山岳列車 (予約) トランズアルパイン号 (朝8時15分にクライストチャーチ駅発)。西海岸最大の町グレイマウス駅に正午12時45分到着。駅前ハーツ営業所でレンタカー手続。ホテル泊 (予約)。ビール工場で試飲と見学。ホテルのマネージャーが東日本大震災・津波のユーチューブを見せてくれた。

4日目 3月14日 月曜：

移動日。ホテルからレンタカー→フォックス氷河村到着→ヘリハイク会社訪問。街散策→Motel泊 (予約)。



5日目 3月15日 火曜：

ヘリコプターで氷河・ピクトリア氷原へ。天気晴朗ラッキー！ヘリハイク約2時間半。モーテルで休憩後、フォックスの街近くの、夕日映えるマセソン湖畔一周（同モーテル泊）。

6日目 3月16日 水曜：

午前、朝のマセソン湖面が鏡のように、マウントクックなどの南アルプスの山々を美しく映す。湖畔トラックを森林浴ハイキングで一周。午後、フォックス村からさほど遠くないタスマン海・グリスピース・ビーチ。雨模様。コロコロの動物のマニューアー（ウンチ）をきにしながらかうオーク。平たい黒い小石を敷詰めたような浜が続く。大きな枯れ木の根っこがごろごろ。誰かの、バーベキューの残り火を発見・消火。

7日目 3月17日 木曜：

氷河村と別れを告げ、レンタカーで移動。国道6号線へ。朝から雨模様。昨日の海岸ウオークは正解。氷河からのフォックス川は白い粟粒（アワツブ）となって流れている。空は鉛色。山並みは、もや。運転には支障なし。ガソリンスタンドなし。山の中腹から白い数条の滝。フランツヨゼフの環境省自然保全事務所で、大きな立体地図を触りながら、現地形の学習。ワタロワのコーヒーショップで昼食。湖や海辺で遊ぶ。小雨の中、ホキティカで適切なモーテルを見つける。

8日目 3月18日 金曜：

ホキティカの朝は晴れ。そろそろ帰国準備のためにショッピング。思い思いにフリータイム。毛皮工場を併設の店に人気。クライストチャーチ大地震はホキティカに被害が及ばなかったと店の主人。逆に、東日本大震災を心配してくれた。少々冷たい風のカニエラ湖畔の石原や枯れ樹に座って野外昼食。チャプ、チャプという漣を聞きながら、パン、バター、トマト、バナナ、ハムなど。水鳥が餌を求め、にぎやか。

9日目 3月19日 土曜：

きょうは山の秘湯マルイアが目標。モーテルを10時5分に出発。白い波頭のタスマン海を左にみながらの快晴のドライブ日和。6号線農家の果物店の周囲のにわとり放し飼い。完熟アプリコットがおいしそう。お次はハニーショップなどなど。珍しく車が渋滞。クラシック・ビンテージカーが延々と続く。88台の見事な車のラリー。側道に入り、彼らと談笑。ここでも、東日本大震災と津波に対する見舞いの言葉があった。グレイマウスで給油と昼食。7号線を北上。羊さんの牧場を



パチリ。マルイア・ホットスプリングス（温泉ホテル）に4時過ぎ到着。男女混浴の露天風呂は水着着用。夕食の最初に、全員でクライストチャーチおよび東日本地震の犠牲者の御霊に黙祷。旅の無事を思いつつ、日本のホテルが経営する日本式風呂を味わい楽しむ。



10日目 3月20日 日曜：

朝のすがすがしいホテル玄関前で、おかみさんが私たちの集合写真のシャッター。この写真はホテルのホームページに三重豪 NZ 協会宿泊の記事とともに掲載された。朝もやのヒンヤリしたアルパイン・ネイチャーをウオーク。ルイス・パス峠のルック・アウト（見晴らし場）から海拔800mの湖。もやが上がるにつれ青空と太陽。湖面が黒からブルーに変わり、鏡になって周辺の木々を映す。クライストチャーチ近郊の大温泉プールの町・ハンマースプリングスで昼食と自由行動。旅行最終地クライストチャーチのリカトン・ショッピングセンターで買物。モーテル泊（予約）。

11日目 3月21日 月曜：

クライストチャーチ国際空港前のハーツにレンタカーを午前10時前に無事返納。空港発11時50分SQ0298→シンガポールチャンギ空港に夕方17時25分到着→空港内のアンバサダートランジットホテルにて休息。

12日目 3月22日 火曜：

深夜午前1時、シンガポールチャンギ空港発SQ0672→朝8時15分 セントレアに全員元気で帰国。

(2)「NZ 協会第10回親善交流旅行に参加して」 木村靖子

6月にオーストラリアへの旅に参加したその同じ年に、ニュージーランドに行かせて貰うのは贅沢だとは思いながらも、きらめく氷河の旅と聞いてはどうしても行きたくて、古希の記念と言うことを口実に家の人たちを説得したのでした。

一 時差四時間時計進めて空港に降り立つ今日よりニュージーランド旅

3月11日、11時にセントレア空港を出発したので夕方に日本で大地震が起こったようとは思ってもせず、シンガポールで乗りつぎ、クライストチャーチ空港に12日お昼前に着いたのでした。

二 災害地の近くの公園寒々とバラは咲けども人気もなく

空港からバスで予約済みのリカトンのモーテルへ行き、荷物を置いてから散策に出かけたのでした。

13日の朝、山岳列車「トランズアルパイン号」で西側のグレイマウスへ。かなり高いところを通ったらしいのですが、見えない私には感動は有りませんでした。

グレイマウスでレンタカーに荷物共々お世話になることになりました。車は快調に走って予約済みのマセソンレークモーテルへ。この旅行のメインはなんと言っても、フォックス氷河を歩くこと。マセソンレークモーテルに泊まった一泊目の夜は、暴風雨のように降り続いていたので氷河行きは無理かとあらかじめかけていたけど、夜が明けると晴天で、早朝から空にはヘリコプターの音が聞こえていました。私たちも朝食もそこそこに勇んでヘリコプターの乗り場へ向かったのでした。

三 足の位地誘導されつつ高きへりに乗れば耳栓耳守るため

四 マスクやめきれいな空気吸えと言うガイドは若く澁刺とした娘（子）

五 アイゼンで足を固めて歩き始むクレバスまたぐに心引き締む

六 表面は白いが中は青いという氷に触れみる冷たさ感じず



七 階段を刻みて我らを誘導す氷穴の壁はぶ厚き氷

八 氷河ハイクに全盲はわれひとり ガイドはなにくれ手を貸してくれぬ

南緯43度にあるフォックス氷河。山は3000メートル級という。ヘリコプターから降りた地点は約1000メートル。2時間半散策させて貰った。

九 舞い降りるヘリの風圧ものすごく飛ばされぬようかがみて待ちぬ

再びヘリコプターで下へ降り、車でマセソン湖に向かう。

十 木の幹や小枝にまでもびっしりと土など不要と湖岸の苔は

湖は大きいらしい。もう、夕方だったし、曇ってきたので湖面に山々を写すという状態では無かったので次の朝もう一度湖に向かう。朝日に映えてとてもきれいそうだ。

十一 マウント クックをくっきり写すマセソン湖見入る人等の目を借りたきに

ここのモーターには3泊して、ホキティカへ向かう。ホキティカでは翡翠や羊の毛皮を買った。この毛皮はあたたかく、手放すことが出来ない。もし、ニュージーランドへ行ったら10枚でも買ってきてと嫁が言っている。



この旅行に参加された皆様にはそれぞれ、お礼を言い尽くせないほどお世話になりました。ありがとうございました。本当に素晴らしい旅行をありがとうございました。

(3)「いい旅でした」

伊藤和子

ワクワク ウキウキの旅

今回のNZ旅行は チョットやソットでは中々味わえない！氷河村でのヘリハイク！

ヘリコプターに乗せてもらうのも生まれて初めての経験！心ワクワクでした。足が短い！？ためか、なかなか乗り込めずに後ろから押しあげてもらってようやく座席に座ることが出来ました。

ヘリコプターは、6人乗りで シートベルトを、しっかり締めて、さあー！出発 山に向かって飛び出しました。山々を見下ろしながらウキウキ！ワクワク！スリル満点！氷河の中腹に、ヘリコプターは着地、ヘリコプターから降りるのも一苦労！靴裏に滑り止めの金具を着けて、さー出発！所々クレパスの大穴有り、右足左足と大穴を避け誘導してもらいながら登っていきました。

初心者はここまでという所には、凄く綺麗なブルーの洞穴とかトンネルがあり、あちこちでのクレパスは、何と美しいこと！

それに雪解けの流れている水をペットボトルに汲んでもらって、喉を潤しました。何と！生き返った感じ！少し大ききかな？・・・



細々と残っている視力で、しっかりと目に映し、頭に詰め込みながら、ヘリコプターの乗車口まで、登っただけ下りました。

ヘリコプター待ち時間の間に、おやつを開けたり、外人さんを前にして、日本の歌（ふるさとほか）を皆で合唱！外人さんからは大うけ！でした。

氷河を歩くのは 最初は少し怖かったけど、楽しく歩けました。これには天候にも恵まれたおかげですが、この前日夕方にはしよぼしよぼ降りだした雨！夜中には台風のような雨の音！を聞きながら、明日はヘリコプターは飛ばないかな？と思いながらもとうとう眠りについて、目覚めた時には雨は止んでいたという、これには本当にラッキー！でした。

それに風景がどこへ行ってもとても綺麗で特に、マセソン湖の湖面に映し出される 山々が美しいこと！あまりにも綺麗なので、黙ってはおれません。来客の度に携帯を出して、写してきた写真を見せています。

出発前に行き先が地震！でもよい決断を出してもらい楽しめました。皆様には大変お世話になりました事ありがとうございます^0^。お礼が遅くなりすみません、良き旅をありがとうございました。



(4)「記録：フォックス・ヘリハイク」

旅行5日目 3月15日 火曜

ヘリコプターや小型飛行機の快音が僕を叩き起こした。「やったあ、晴れだ」。氷河フライト観光のヘリコプターが飛んでいるのだろう。パタパタというヘリの飛行音を聞きながら、スーパーマーケットで買っておいいたパンやハム、生野菜などで朝食を済ませた。

9時半頃、外に出た。強い日光で頬が熱い。ヘリコプターが、青く澄んでいる東の空に飛んで行く。銀色に光る氷河の方向だ。心臓がときめく。うちの駐車場から一台、二台とお客の車が出て行く。モーテルには、かなりの客がある様子。子供連れの中国語のにぎやかな家族も泊まっている。

ヘリハイク営業所へ。たくさんの人でごった返している。待合所にはフォックス氷河の大きな絵、写真がある。「みなさんを、氷河にガイドすることは私たちの誇りです」というプレートもある。みやげなどの売店、軽食も取れる。PO Box も設置されている。



外のベンチに座ってヘリハイクの出発時間を待つ。以前、家族と来たときと店の基本形は変わっていない。中年の白人男性が、日本語で、さわやかに自然体で話しかけてきた。「日本は、地震と津波で大変ですね。日本にいるご家族は大丈夫ですか。私は15年前、神戸に住んでいました」。この旅行中、見知らぬニューージーランド人から、このような‘地震・津波見舞い’についての率直でやさしい言葉を、心配そうに、心をこめて、あちこちでかけられた。

正午5分、バスに乗って10分ほどで、ヘリ・ポートに着いた。以前に来たときよりヘリ・ポートの整備が進んでいた。かつては、ヘリハイクのための準備は、ほとんどが、みやげ店のある営業所で行われた。

ヘリ・ポートの建物の中で、注意やアドバイスなどがあった。「氷河は、氷、雪、アイスバン、クレパスの世界。必ずガイドに従うように。また、ヘリの発着時には爆音と風圧が強いから注意すること。声は届かない。手で合図する。いまは晴れていて風もないが、天候は絶えず変わる。ヘリで氷河まで行き、皆さんを降ろす。帰りはまたヘリが迎えに氷河に行く。氷河ハイキングは約2時間半。氷河歩きは、そんなに難しいものではない。楽しんできてください。Good Luck!」。

氷河ハイキング用の、かかと、足首をほごするための登山靴合わせ。室内を歩いてみる。少し重い、足首とかかとの部分が締まって身も引き締まる思い。はいてきた靴を、余分の小物とともにロッカーにしまう。白杖は、氷河現場まで持って行くことにした。

氷河ハイキングの現場にトイレはない。2時間半近く氷、氷、氷の世界にいる。出るものは、ここで出しておかねばならない。上空に小型飛行機が舞っている。遊覧飛行だろう。氷河観光だろう。氷河の山々の間の奥に雪をかぶった山が真っ白に光っている。初秋の太陽はまだまだ暑い。南半球の紫外線は強烈。皮膚癌が多いという研究がある。

大きなエンジン音を響かせているヘリコプターへ、私たちグループは二つに別れ乗ることになった。ヘリ内の重量バランスをとるために、事前に全員の体重チェックが建物内であり、それによって座席が決められた。僕とグループ3人は、残り6人とは別々のヘリとなった。6人組みが、バリバリバリと爆音を残し、太陽に輝く氷河に向かって先発した。僕らは、係員の丁寧な手助けを受けて、ヘリに乗り込んだ。後部座席に大柄の白人二人が座り、前に、僕と体重の軽い仲間の女性三人が座った。シート・ベルトを閉め、大きなヘッドホンを着けた。ヘッドホンは、パイロットの案内用と爆音防止用らしい。だが、案内はヘリの音に遮られ、途切れ途切れしか聞き取れない。Tさんが大声で、飛んでいるヘリの窓から見える山々の雪景色などを説明してくれるのだが、視覚障害者の僕には、Tさんの説明が、爆音と重なり、イメージ化できない。そうこうしている間に氷原に着いた。気をつけながらヘリから降りる。晴天。見渡す限り氷原なれど、不思議なことに、暖かい。われわれが乗ってきたヘリは、直ぐにとんぼ返り。爆風に吹き飛ばされないように、しゃがみこんで、ヘリの飛び立つのを待った。ものすごい爆音と爆風を残してヘリが飛び去った。真っ白な雪と氷と静寂、といたい、上空を飛ぶ遊覧飛行する小型機やヘリの飛行音、氷河やいたるところにあるクレパスを流れる雪解け水が聞こえてくる。

われわれの到着を待っていた若い女性ガイド・アマンダが、

「ウエルカム（ようこそ氷原へ）」と第一声。

「どちらから？」

「ジャパン」と僕。

「私の英語、わかる？」とアマンダが確かめる。

「質問があったらいつでもしてね」。

そして、アイス・ピッケルとアイゼンを、一人ひとりに配った。アイゼンは、滑り止めのために登山靴につける金具。靴の底にくくりつけて用いる鋼鉄製のスパイク。ピッケルとアイゼンを併用することにより、氷の上を歩くとき、滑落を防ぐ。

アマンダが、道を開くように先頭を、われわれを振り返り、ときには、手引きしながら行く。一筋の、で



こぼこの細い氷上の通路を、私たちは慎重に歩く。氷上の道は一夜の嵐である日には無くなっていることもあるという。常に、新しい通路をつくって行かねばならぬらしい。

坂を下る途中アマンダが立ち止まった。そして、マスクをしている T さんに尋ねた。

「どうして、マスクなんてしてるの？ここには、ポリューション（大気汚染）なんて、ないよ。」

「いやー、これ日焼け止めよ」と T さん。爆笑。

「私が日焼け止めを持っている。皆つけたら」とアマンダがクリームを差し出した。

僕は福井県の出身、日焼けに弱い。クリームを手に取り、額や頬に刷り込んだ。

サラサラと水が流れる音が聞こえている。遠くに滝に落ちるような水音もする。

アマンダ「ここからは、ぼんやりしてははっきり見えないが、西の方向に、タスマン海があります。また、ニュージーランドで1、2位の標高を持つマウント・クックやマウント・タスマンの山々が聳えています。マウント・タスマンまではここから約15キロメートル。そんなに遠方ではない。だけど、ここから歩いては行けませんよ。」

マウント・タスマン (3,497 メートル) は、ニュージーランドで二番目に高い山。最高峰 (サイコウホウ)、は、3,754 メートルのマウント・クック。先住民マオリ語ではアオランギ。雲に聳える山という意味だそうです。アオランギは、1991年11月14日に、頂上部が崩落し、10メートル低くなったと聞いた。参考までに、富士山の海拔は、3,776 メートルである。さらにいえば、ニュージーランドの第3位の山は、マウント・ブラム Brum (3,198 メートル) である。

アマンダの話の続き。「南方の、直ぐ近くに見える氷山までは4キロメートル。きょうは、そこまでは行けない。私たちが今、立っているこの地点は、とても貴重なところなんです。本日は天気晴朗。ここは1年のうち、雨が200日、こんな日は珍しいのよ」と彼女が言ったとき「わあ、すごーい。やったあ、ばんざーい」と大歓声。

さらにアマンダ「日焼け止めは、ほとんどの日には必要ないが、きょうは必要ね。」

「ラッキー！」。

女性群、満面に笑み。昨夜は、怖いくらいの土砂降り (ドシャブリ) で、多くの仲間が、雨天を予想していた。

ここで小生が提案。「アマンダはすばらしいガイドさん。お礼に‘富士の山’をプレゼントしよう。明るく元気な歌がこだました。

「サンキュウ、サンキュウ。」と、うれしそうなアマンダ。そして「この水は飲めるよ。ひんやりした、きれいな水よ」。みんな屈んでクレパスに手を入れ水を飲む。「ああ、冷たい、おいしい」と言いつつ、氷河の水をしっかりと身に沁みこませる。

アマンダ「水筒があったら、いれたらどうですか。買って来た水を捨てて入れ替えた方がいいよ。無料だからね。」と微笑む。きょうは暖かいので氷が溶けている。「あちこち勝手に歩きまわると危ないからね」アマンダはアドバイスを忘れない。

氷上 (ヒョウジョウ) ハイキングは、さらに続く。アマンダにサポートされながら、幅30センチほどのクレパスを、一人ずつ、おそるおそる、あるいは飛ぶように渡る。



そんなに奥深いクレパスではないというが、ちょっとした勇気が要った。「こんな経験、なかなか出来ない。来て本当によかった」と目に障害のあるIさん。

登りになった。アマンダは、スコップで氷をけずり、階段をつくって行く。われわれは、ただ、それを感じしながら見守るばかり。

上り詰めたところに氷の洞窟があった。入り口に大きなツララが何本も出来ている。ツララ先から水滴がポトリ、ポトリ。その奥に10メートルほどの氷の洞穴があるという。アマンダがツララをスコップで叩き落とした。洞窟に一人ひとり入る。中は狭く天井部分が低い。奥には大きなクレパスがあるという。数人ずつ背をかがめて進んだ。両手を氷の壁に触れながらゆっくり歩いた。この氷の青白いブルーの洞窟は、2週間ほどで溶けて崩れるそう。ときに天井から水滴。クレパスを流れる水音。出入口付近の氷の天井は、青空に溶け込んで、とても表現できない、透きとおった、えもしれぬライトブルー。以前に見た氷河ハイクの氷の洞窟体験の感激と重なった。これぞ、大自然が織りなす芸術、氷と太陽の美の傑作だ。以上



Society

編集後記

2011年2月22日のニュージーランド地震の発生から1年がたち、3月11日で東日本大震災の発生から1年がたとうとしています。どちらもたくさんの方々が犠牲になりました。今号の写真や記事にもその爪痕や記録が残されています。その一方でニュージーランドの大自然の写真も印象的です。私たちの住んでいる地球の大きさや人間の小ささをなんとなく感じた稲垣でした。なお、今号の写真は、すべて北出勲さんの提供です。

発行 三重オーストラリア・ニュージーランド協会
発行責任者 宮本忠 TEL/FAX 059-368-2112
〒510-0226 鈴鹿市岸岡町2626の95
Email: tyy15m@mecha.ne.jp
※ この会報にある文章・写真の無断掲載はご遠慮下さい。